



ショパン家のころべえ

鶴見正夫・作

鈴木康司・絵



ショパン家のころべえ

昭和53年6月24日

著者 鶴見正夫

発行者 江口克彦

発行所 PHP研究所

〒601 京都市南区西九条北ノ内町11

電話 075(681)4431〈代表〉

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 和田製本工業株式会社

© 1978 Masao Tsurumi. Printed in Japan

乱丁・落丁本はご面倒ですが弊所出版部宛お送り下さい。送料弊所負担にてお取替え致します。

(定価はカバーに表示してあります)



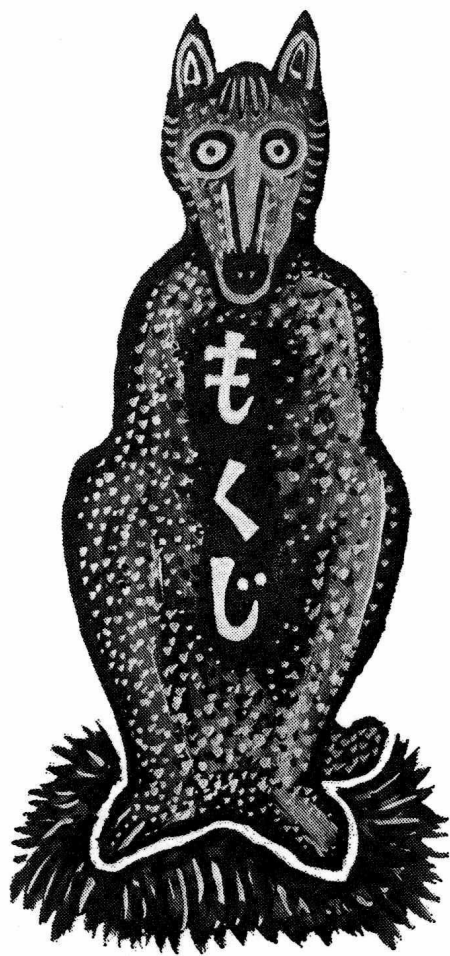
シヨパン家の
ころべえ

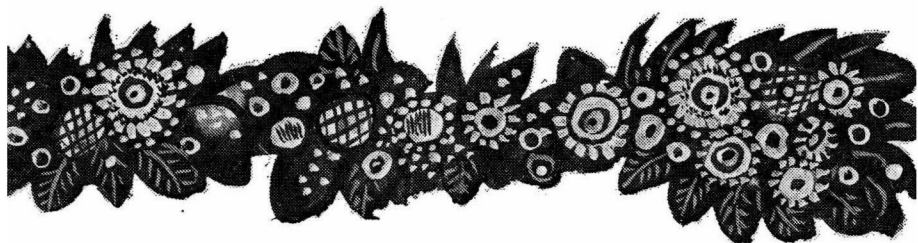
雀見正夫作



鈴木康司絵

装幀デザイン
上田晃郷





ほんごつピアノ

8

かつちゃんのひみつ

25

きえた子イヌたち

44

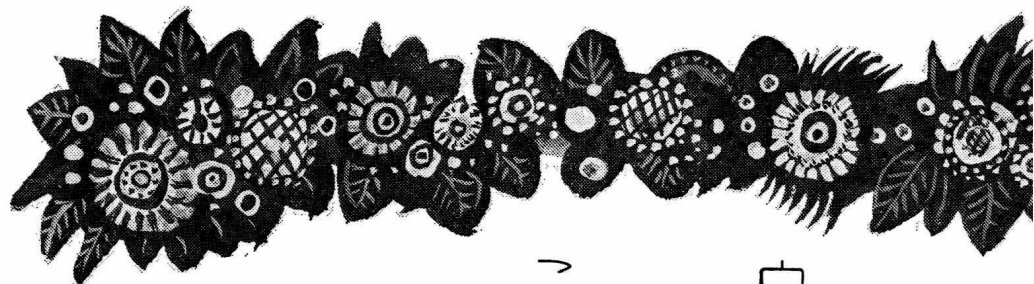
原っぱでのさようなら

62

おまえの名はころべえ

81





ウラシマたちのそうだん

ピアノのねんしゅう

ころべえよ どこへいく

小犬のワルツ

かつちゃんへの手紙

178 156 139 120 101



著者・鶴見正夫(つるみ・まさお)

1926年、新潟県生まれ。早稲田大学政経学部卒業。在学中から詩・童謡を学ぶ。主著に「日本海の詩」(詩集理論社)「長い冬の物語」(あかね書房)「鮭のくる川」(国土社)など。現住所 〒167 東京都杉並区松庵3-24-2

画家・鈴木康司(すずき・こうじ)

1948年生まれ。高校卒業後上京。おもな作品に「ゆきむすめ」「ひつじかいとうさぎ」「まごあぐうす」「まぼろしのセミの歌」(PHP研究所刊)などがある。現住所 〒350-13 狭山市鶴ノ木12-25



ほん「つピアノ

いつのころからか、わたしのうちのことを、おばさん（おとうさんのいもうと）たちは、「シヨパン家^け」とよびます。

「さおりちゃんちは、シヨパン家ね。」

まだ、ようちえんにいていたころのこと。おばさんにいわれたわたしは、

「いくらパンがすきでも、パンばかりたべてるわけじゃないわ。」
ふんとして、そんなへんじをしました。

お婆さんは、

「うふっ。」

おかしそうに、ふきだして、

「たべるシヨクパンじゃなく、人の名よ。シヨパン、つまりフレデリック・シヨパンのこと。かれは、ポーランド生まれの作曲家。わずか三十九才でなくなった人だけれど、ゆうめいな曲をいくつも作った大音楽家よ。」

まるで高い鼻からとびだしてくるような声で、わたしにはよくわからないことを、いっきにいつてのけました。

（お婆さんたら、えらそうに、知ったかぶりをして、人をばかにしているみたい。）



とっさにわたしは、そんなかんじがして、あとは聞こうともせず
に、外へとびだしていきました。

だから、どうして、おばさんたちが、うちのことを「シヨパン
家」なんてよぶのか——それがわかったのは、だいぶたってからの
ことなんです。

わたしの家には、わたしが生まれるずっと前から、一台のピアノ
があります。

こげ茶色で、あちこちきずだらけになったピアノです。白いけん
ばんもくろずんで、うすよごれたかんじ。どこから見ても、近ごろ
の新しいピアノのように、すてきなかどうかではありません。

そんなふるびたピアノを見てそだったせいか、わたしは、ピアノにたいして、いっこうにきょうみがわかないまま、すごしてきました。友だちがピアノのおけいこにかようのを見ても、うらやましいと思ったことなどありません。

小学校にはいってまもなく、

「さおりも、ピアノを習ったほうがいいんじゃない？　学校の音楽の勉強にだってやくだつし。」

おかあさんは、

（せっかく、うちにはピアノがあるのに。）

そういわんばかりの顔で、わたしにすすめました。そのときもわたしは、

「いや。」

と、ぶっきらぼうに答えて、くびをよこにふっただけでした。おかあさんは、こまったというよりは、かなしそうな顔をしたまま、あとはなにもいいませんでした。

わたしは、おかあさんにわるいことをしているような気がしました。なぜって、わたしの目には、おかあさんがなぜだか、きずだらけの古いピアノを、まるでだいじなたから物にでもしているように見えていたからです。

おかあさんがどうして、こんなふるぼけたピアノをだいじにしているのか——そのわけは、まもなくわかりました。

きっかけは、おとうさんとおかあさんの口げんかです。

その日は日曜日。おとうさんは朝からたいくつそうに、ごろんとよこになったまま、テレビに見いていました。

「うちがせまいのに、ごろごろされていたんじゃ、そうじもできないわ。」

おかあさんは、追いたてるように、そうじ機きをもちだしました。するとおとうさんは、いきなりどなりだしました。

「せまいのは、ぼんこつピアノなんかあるからさ。あんなピアノ、がらくた屋にでも売ったほうがいいんだ。」

「まあ、ひどい！　いくらなんでも、がらくた屋に売るなんて！」
おかあさんは、細い目をせいっぱいひらいて、どなりかえしました。その声を聞いて、二階にいたおにちゃんが、だだだだっ

と、かいだんをおりてきました。

「そうだよ。パパのいいかた、いけないよ。」

わたしより六つも年上のおにちゃんはもう、中学生になっていました。おとうさんの前に、ぱっと立ちはだかって、にらみつけました。

とたんに、おかあさんはとなりのへやにかけこみ、ピアノにしがみついて、なんとなきだしてしまいました。そのうしろすがたが、わたしには、小さな女の子がなきじゃくっているように見えませんでした。

ひょっとしたら、おとうさんにも、そう見えたのかしれません。

おとうさんは、じぶんのほうからとなりだしておきながら、こんど